



(表面より)

毎年この水泳のつどいに参加して嬉しく思う事は、子ども達の一年一年の成長が見られる事です。障がいのない人から見ると当たり前に出る事が、この子供達は少しづつしか進めません。けれど、年々出来る事が増えてゆき、また笑顔を見せてくれる時間も多くなります。普段はなかなか人のお付き合いは難しいですが、ここでは遠慮なくみんなと楽しく過ごせます。この水泳のつどいはそんな大切な行事のひとつです。いつも温かく接して下さるリーダーの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。また来年もみんなに参加できる事を楽しみにしております。



ごきう500

スタッフミーティング

「よくぞここまで

頑張った

継続は力なり」

顧問 芝田 徳造

1 全国的にひとつの行事が100回を超える事業はない、来年500回を迎えるが、世界的にも類はないだろう。第1回からの参加者は約5700名。スタッフ・体育館の努力に感謝する。最初頃参加していた小学低学年の子どもが、今では中高年になっても参加している。スポーツのつどいに参加している障害者の顔が素晴らしい。同様に家族も素晴らしい表情をしている。

2 63年京都国体から京都の障害者スポーツが広がった。昭和56年に京都国体の開催が決まり、陸上・卓球大会を開催した。年には水泳大会を開催し

障害者スポーツの原点がスポーツのつどいであり、京都国体で日本で初めて取り組みとして、重度障害者の種目として、電動車いすスラローム、ビーンズバック投げ、開会式で施設利用者・養護学校生徒と職員・大学生で行ったマスゲーム。公開競技として卓球バレー、車いす駅伝を行い。駅伝は閉会式直前の競技場に京都チームがトップでゴールした。その場で京都市長・知事も高校駅伝・女子駅伝と並んで全国車いす駅伝の開催が決まった。水泳競技の開会式でシンクロを行い、翌年からシンクロフェスティバルとして開催するようになった。

スポーツのつどいが京都の障害者スポーツの原点というのは、最初は府立体育館だけのつどいから、丹後から丹波・乙訓・城陽と府内の各地に広がり、現在も継続して開催されている。つどい500回は振興会の全組織を上げた取り組みにしなればならぬ

3 つどい500を契機にスタッフ・ボランティアを募集し、つどいが長く続くように大募集を行い、大学や専門学校に当日のスタッフとして参加を呼びかけ、その後も継続して参加してもらおうように働きかけることが大切。

障害のある人々に、「楽しさ」と「生きる力」を与える場として、存続し続けてほしいと思います。

質問 なぜ府立体育館でスポーツのつどいを開催するのをこだわったのか

つどいを府立体育館で行っているのは、障害者スポーツセンターは障害者の専用施設であってはならない。障害者の優先スポーツセンターでなければならぬ。ノーマライゼーションという考えから、府立体育館で行わなければならないと考えている。障害者を包み込むような社会でないと

いけないと考えている。質問 中途障害者の参加について

障害を負って直ぐに障害を受け入れるのは困難。障害を受容できればスポーツ活動に参加するなど大きく変化する。日本では明治時代から教育を受けることが猶予や免除され教育を受ける権利が失われていた。教育を受けなければスポーツを行う経験がない障害者がつくられた。つどいの取り組みから、重度の障害の人の競技としてシンクロや卓球バレー・車いすハンドボールなどが行われた。

